

WHO 西太平洋事務所インターン報告



東京大学医学系研究科
公共健康医学専攻臨床疫学・経済学教室

廣瀬直紀

東京大学医学部健康総合科学科卒。農村部の病院にて看護師として勤務後、大学院進学。医療大規模データベースを用いたヘルスサービスリサーチを学ぶ。

配属先事務所・部所

フィリピンはマニラに位置する WHO 西太平洋事務局 (WPRO) の Integrated Service Delivery, Department of Health System に配属されました。本部署は医療人材、医療安全、伝統医療などの医療サービスに係る政策を担当しています。私は医療データベース解析をもちいた看護人材に関する調査に携わりたく、WHO の日本人オフィサーの助言のもとで本部署への配属を希望しました。

インターンの主な仕事

WPRO 側のスーパーバイザーと相談のうえで、私の任務は「国際保健データベースを用いて、質の高い医療人材へのアクセスを持たない世界人口の推計モデルを構築する」ということに決まりました。WHO インターンの業務は指導を受けるスーパーバイザーによってその性質、業務量が大きく異なるため、なるべく自分の専門性やキャリアに沿った業務をさせて頂けるように、渡航前にはじっくりと交渉した方が良いと思われます。

以下が具体的な業務の手順です。

- I. 既存の国際保健データベースのレビューを行い、本研究に使えるデータベースを選定しました（「質の高い医療人材へのアクセス」に関する質問を含んだデータベースで、かつ世界全体から十分なサンプルが確保できるもの）。
- II. 推計モデルの構築のために、まず概念モデルの構築を行いました。ここでは、

質の高い医療人材とは何か、どの医療サービス分野か、どのように複数の指標を統合するかなどの定義づけを行っています。

III. 実際に国際保健データベースを解析し、推計モデルの構築に必要な基礎データの整備を行いました。各国各年でデータが異なるため（例えば、バングラデッシュだけでも 2014 年、2017 年と複数年分の異なるファイルがある等）、ファイルをダウンロードしては解析し、の繰り返しでした。合計 75 か国分の解析を要したため、これだけで約 1 か月もかかってしまいました。

IV. 基礎データをもとに、推計モデルを構築しました。どのような統計手法を用いるか、感度分析をどのように行うかなどの専門的な判断は修士 1 年生の私だけでは限界があり、そのため WHO ジュネーブ本部の統計官、および日本の大学の生物統計学の教員に助言を求めつつ、モデル構築を行いました。

V. 推計モデルを構築し、最終産物として「2030 年時点において、low income country 全体では質の高い医療人材にアクセスできない人口が~万人存在する」という数値の提示を行いました。

VI. インターンはその終了前に Final Presentation として所属部署および業務に関連するプロフェッショナルスタッフに対する発表を行います。上記の推計について発表し、最終的には学術論文として投稿することを勧めて頂き、帰国後の現在も WPRO のスタッフと連絡を取りながら、論文投稿の準備をさせて頂いています。

学んだこと

最も大きな学びは、WHO という世界の保健政策をアドボケートする機関に身を置き、ハイレベルの意思決定が行われる様子を垣間見られたことです。インターン前は、WHO のレポート等を見ても、ただの書類上の文言としか捉えることができませんでした。しかし、WHO インターンとして活動する上で、レポートの中の一文が執筆される過程でどのように担当官が議論を行い、政治的 이슈が考慮され、そしてその一文が政策場面でインパクトを持ちうるかということを感じたこととして知ることができたのは大きいです。

次に大きかったのは、人生で初めて英語のみで長期間活動する機会を得たということです。日本においても留学生向けの授業に参加したり、オンライン英会話をしたりと、英語環境に触れることはありましたが、業務において英語が求められる環境に身を置いたのは初めてでした。業務に支障がでないレベルでコミュニケーションをとることはできたものの、統計や疫学の専門的な話を英語で行う際には常に不全感が付きまとい、英語力不足を痛感しました。特に渡航 7 日目までは「話す英語力の低さがばれてしまうから、なるべく黙っていよう」と机の隅で縮こまっていた。しかし、それを過ぎたところで「だめだこんなにじゃ仕事にならない。私の英語は日本語なまりがあるだけで、コミュニケーションは取れている。聞き取れなかったとしても、向こうが悪いんだ」と臆面もなく

開き直ることに成功しました。これが WHO インターンにおける一つのブレイクスルーであったように思います。なお、WHO は言わずもがなの国際機関であり、そのスタッフは世界中から集まっています。つまり、各国なまりの英語を聞き分けねばならないということで、これは渡航前には予想していなかった困難の一つでした。

印象に残ったこと

スーパーバイザーの度量の大きさに感動しました。私のスーパーバイザーは元医師のインド人の方でしたが、私にはかなりの自由を与えてくれていました。スーパーバイザーによっては仕事の進捗や会議の参加にその都度許可を求める方もいらっしゃるようですが、私のスーパーバイザーは基本的には「私の好きにしたい」とおっしゃられ、面談も私が必要とするときにいつでも声をかけていいというスタイルにしてくださっていました。推計モデルの構築に関して、まず私が

自分自身で考え、それについてスーパーバイザーがサポートする形でコメントするという方針で行ってくださり、常に私をエンパワーしてくださっていたと思います。インターン初日に「私にとって最も大切なのは、君が成長することだ」とおっしゃってくださった通りの関わりであり、このようなスーパーバイザーに巡り合えたことに深く感謝しています。

WHO インターンは修士以上の学生を対象にしていたと思うのですが、「ある程度具体的なスキルを身に付けてからインターンに臨んだ方が良い」と私は感じています。私の場合は渡航前に統計ソフトを用いた医療データベースの研究論文を学術誌に投稿させて頂いており、そのことからスーパーバイザーが「データベース研究に取り組みさせてやっても良い」と考えてくれていたように思います。WHO での業務はどれも刺激的なものでしたが、専門性の高い仕事の方がやりがいもあり、また業務後に学術論文にさせて頂ける可能性もあがると個人的には思

インターン仲間との一枚



いました。インターンに求められる能力は部署、スーパーバイザーとのマッチング次第だと思うのですが、統計解析スキル (R、Stata など)、システムティックレビュー、メタ解析などのスキルがあると、より専門的な業務を経験できるのではないかと感じています。国際機関に就職する道筋としては外務省の JPO 制度がメジャーですが、その他にもインターンとして業績を残し、コンサルタントとして採用されるという道筋があるということを知りました。この点でも、力を発揮できる専門性を蓄えてからインターンに参加するのが良いのではないかと考えております。

これから WHO インターンを希望する人へ一言

これまでパンフレットや論文の中の存在でしかなかった WHO でインターンとして活動できたことで、世界中で展開される保健政策が一気に身近に感じられるようになったと思っております。また、日本の保健政策の外側に身を置いて、客観的に捉えるというのも大変良い勉強になると思います。日本を 3～6 か月間という長期間不在にすることの不安はあるかもしれませんが、それ以上の見返りがある経験だと思いますので、ぜひご参加をお勧め致します。



Final Presentation を終えた筆者 (一番右)